

不屈の精神

中村 武羅 夫

田山氏は、私などの記憶によれば、島崎藤村氏も言っている通り、多感にして正直な人であるが、一方に「我」が強く、「我儘」で、ひどく気むづかしいところのある人だったと思う。それが、若い時代には最も正直に現されていた。晩年になるに従って、人間的に、いろいろに変わって来てもいたようだし、人に対しても実に円満で、抱擁的な広やかさが出来ていたようだが、以前、気を負っていた時代には、そうでなかった。

作家としても、不断の努力と精進とによって、築き上げて来たような人であるが、人間としても同じことだ。不断の努力と精進とによって、だんだん晩年の円満さ、広い心境と、緩やかな気持ちとを築き上げて来たのだと思う。人の厚意や、親切を、極めて無邪気に、素直に、喜びを以て受け入れるような円満さに到達したのも、それは若い時代からそういう傾きはあったのだろうが、それが、あそこまで玲瓏れいろうとして磨かれて来たのは、全く、不断の努力と精進とによって得られた賜だろうと思う。

前田晃氏が田山氏について、報知新聞の文芸欄に書いているものを見ると、田山氏が、その本来の不屈の精神を以て、悪性の不治の難病を克服して、生きようとして、如何に健気に、如何によく闘ったかということ

が感じられて、一種悲壮な感じに打たれずにはいられない。だが、死の直前には、ハッキリした意識を以て、死に直面したのである。臨終に近く、老友藤村氏に、死んで行く気持ちを訊かれて、なんとも言えぬ暗い気持ちがあると答えているところなどは、却って田山氏の徹底的に正直な心の鍛えが現れていて、その厳肅さが、われわれを圧倒する。

(昭和五年六月「新潮」)

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新仮名遣いに改めた。

※出典 当館所蔵「花袋全集 月報 第八号」(昭和二年一月二日)